

# 南波 浩先生を偲んで



南波 浩氏略歴

一九一〇年四月三日生まれ。三年京都帝国大学文学部卒業後、四十六年五月同志社外事専門学校教授として入社。五一年同志社大学文学部教授に就任。五一年六月から五十四年五月まで学校法人同志社評議員。八十七年八月から九〇年八月まで同監事として学校運営のために尽力され、八一年同志社大学名誉教授。また、八三年一月には、勲三等瑞宝章を受賞された。  
二〇〇〇年六月二十九日永眠 九十歳

我が師、南波浩先生は忽然と天翔けり給うた。あの季節が再び訪れた。今年の暑さは殊の外に厳しかった。人影の稀な夏のキャンパスには、数十年にもわたる長い年月の記憶が凝縮していた。その光景の中に遠い日の先生の姿があった。

一九五五年四月、我々は初めて先生に出会った。前年に文学部第二部文化学科国文学専攻が創設された。そして漸く第一部にも国文学専攻が開設され、最初の入学式が行われたのである。明徳館五階の会議室で先生方が我々を歓迎してくださった。教授五人と新入生約五十人である。先生は専攻を代表して挨拶された。終生変わることのなかった、あの目元に微笑を浮かべながら、それでいて厳しい顔つきの独特の表情が眼前にあった。新しい先生の学問的論調は激しかった。新しい時代の国文学研究の先端を切り開こう

とされる情熱がそのまま文章になった。

『物語文学概説』は研究史の上に一時代を画すものであった。そこには先生の意気込みが溢れていた。その一方で、従来の文献至上主義を打破しようとする、精緻な校訂と注解を施す斬新な注釈書を刊行された。朝日古典全書の『竹取物語・伊勢物語』などである。

先生のご業績の中心は、何といつても一連の『紫式部集』についての、文献調査、校訂注解、評釈研究である。先生の手になる岩波文庫の『紫式部集』は我々の誇りである。

学会においては、「日本文学協会」をはじめとして多方面にご活躍されたが、中でも、「中古文学会」が東京から事務局を移すにあたって代表委員の任を負われたのは先生に対する大方の評価の表われであつたらう。

先生の学恩を語る資格は自分にはない。この長い年月を掛けて公私にわたって師の慈愛を受けることを得た者として余りにもご恩に報いるものが少なすぎる。慚愧に堪えない。しかし赦しを乞うことはもはや不可能である。先生が教育の大前提として研究を置かれたことを振り返りながら、せめても、師と同じく、同志社を去った後も研究に邁進することを為し続けたい。

先生は覚悟の人であつた。突然のご入院とご逝去の報であつた。だが、予期されていたのであろうか。前日には、ご令室とご子息たちとお出かけになってご歓談されたとのこと。しかも、ご病状をよくご存知だったとのこととお聞きするほどに、最後まで泰然自若と生きられた先生のお人柄が思われてならない。

廣川勝美（大学文学部教授）

## 能とゲーテと

## ―岸 繁一先生を偲んで―



## 岸 繁一氏略歴

一九二〇年二月一日生まれ。四一年二月大谷大学文学部卒業後、大谷大学文学部助教授を歴て、六三年同志社大学文学部助教授として入社。六五年同教授に就任。八二年に退職されるまで十九年にわたり教育と研究に尽力された。  
二〇〇一年一月四日永眠 八十歳

そのころ八坂神社石段下を南へほんの少し下ったところにLという小さな酒場があった。いかにも草臥れたといった感じのおばさんが一人ぼつんといっているだけ、うそ寒いしけた店だが、これでよくは結構世話になっていた。当時どこでも二時が看板だったのがここは五時六時まで営業していたからだ。それまで陽気に騒いでいた連れが一人帰り二人消えして深夜の街に一人とに残されてみると、これが性分なのかまっすぐ帰れない。或いはなにか心に屈託を抱いていたものか。それから小一時間、Lの止り木でほんやり刻を潰すのである。やがて階段にどたどたと重い登音が聞こえて、入ってくる客がある。これが岸繁一先生だった。なぜかいつも岸先生なのであった。この人はどうしてこんな時間までこんな所にと、ぼくは自分のことを棚に上げて、そ

のつど不思議に思ったものである。おい山本、君はお能の精神がわかるか？ とだしぬけにおっしゃる。先生の科白はいつもこれにきまっていた。ぼくの受け答えもいつも同じだ。歌舞伎なら少しは観てきていますが……。すると先生がにやりとお笑いになる。しかしやり取りはそれっきり。もう少し何か、という気持ちが残ったこともあり、またそれで終わってなんとなくほっとしたこともあったように覚えている。やはりぼくの心に結ばれてほだけぬものがあつたのだろうか。もうかれこれ二十年も昔の話である。けれどもそんな素っ気ない会話もそれはそれでよくにとつて有難いものだった。それでその日を切り上げて、夜の白しら明けにともかくも少し心落着いて我が家に向かうことができたのだから。大酒呑みが誰でもそうとは限らぬが、先生は素面の

時もつねに泰然自若としておられた。人生とはこうしたものだ、といったふうに。しかしそれはけつして諦観などといったものではなく、なにかもつと勁い、覚悟とか信念とか呼ばれるべきものだったと、いまにしてぼくは思う。身の処し方に見る先生のいさぎよさはどうやらそんなところからきていたもののようだ。たしかに先生は終生能に並々ならぬ関心を寄せておられた。一方、専門のドイツ文学研究における中心はゲーテだった。つまるところ彼岸の世界の物語りである能と、徹頭徹尾此岸の肉体に執着し続けたゲーテの文学と。先生にとつて人生とはまさにこうしたものだった――のだろうか。いまは先生のご冥福を心よりお祈り申し上げるばかりである。

山本雅昭(大学言語文化教育研究センター教授)

# 金丸輝男教授を偲んで

## ―その学問的業績



金丸輝男氏略歴

一九三五年五月三〇日生まれ。六二年同志社大学大学院法学研究科修士課程修了後、同志社大学法学部助手として入社。六五年同講師、六八年同助教授、七六年同教授に就任。この間に法学部長を務められ、七年には永年勤務者として表彰を受けられた。  
二〇〇〇年一月二五日永眠 六十五歳

昨年十一月二十五日法学部の鷺江さんから金丸さん危篤の電話をもらい、すぐに入院先の府立医大病院にかけつけました。すでに金丸さんは無意識状態でした。

思いおこせば金丸さんはこの三十数年の間二度の大病を煩いながらも、忍耐強く真摯に生きてくれました。研究と教育に情熱を注ぎ、亡くなる一カ月前のEU研究会にも出席されていました。研究会が終ってから、明日の授業用にと資料のコピーを大学院生にたのまれていた姿を思い出します。

私と金丸さんのおつきあいは一回目の大病を克服された三十数年前から始まりました。その当時から金丸さんはEECの研究をしておられましたが、もっと幅広く国際政治全般の問題にも関心を持っておられ、特にイギリスの国際政治的手

法を学ばれるためR・レイノルズの『国際関係の分析』やH・メイスンの『トインビーの世界政治観』等を真剣に翻訳していました。

その後一九七六年にベルギーの名門ヨーロッパ大学に留学されてからは、専らEEC研究に没頭され、特にヨーロッパ議会の研究については第一人者になられました。

留学から帰国後は研究業績だけではなく、優秀な後継者を育てられたり、グループ研究を組織された功績は大きかったと思います。

後継者の養成では、早稲田大学の福田耕治氏や長崎純心大学の児玉昌己氏は今やEU学会の理事として目ざましい活躍をしておられます。ただ、この養成の過程では厳しい指導をされていた姿が私の印象に残っております。厳しい指導がこ

の両氏等を生んだものと思われます。

また、グループ研究の組織化に関しては、EUという国際組織を研究するためにはどうしても多面的な研究が必要であり、そのためには専門の違う学者を集める必要性を感じられたのだと思います。

このグループ研究が認められ、現在の「私立大学術フロンティア事業」研究となり、文部科学省と同志社大学から高額な奨学金が五年間継続して支給されることになりました。

最後になりましたが、金丸さんに、まだ海のものとも山のものともわからないEEC研究開始の契機を与えたのはナシヨナリズム国家の超克を主張されていた恩師岡本清一先生ではなかったかと思えます。

荒岡興太郎（京都精華大学教授）



# 最後まで同志社を 愛された：岡本清一先生



岡本清一氏略歴

一九〇五年四月二六日生まれ。三〇年同志社大学法学部法律学科卒業後、四八年三月同志社大学法学部教授に就任。この間学生部長、法学部長を歴任。六六年一月に依願退職されるまで教育と研究に尽力された。二〇〇一年一月一〇日永眠 九十五歳

この一月、岡本先生が逝かれたという知らせを受け、急いでお宅にうかがった。ベッドに横たわり、手にしつかり十字架を握られた先生は、実に尊厳にみちた顔をしておられた。生前、周囲にいる者を励まし、勇気付けられてきた先生は、死の床にあってもなおわれわれに道を説かれるかのようにだった。

先生は、一九五〇年代から六〇年代にかけて、法学部で政治史や政治学の講義を担当された。当時、先生の講義にどれだけの多くの学生が魅了されたか、数えきれないぐらいだ。先生は教壇でノートを読み上げたり、外国の文献をひけらかす、などということとはされなかった。独自の発想と緻密な論理だけで、ぐいぐいと話をすすめられた。あんなにも緊張にみちた、あんなにも濃厚な講義に接することは、もう二度とないだろう。

一九六〇年代の半ば、先生の関心は主として「聖書のなかの国家」にあった。

そこで、大学院ではウェーバーの『古代ユダヤ教』をテキストにされ、受講生に必ず大型の旧約聖書を購入するよう命ぜられた。世俗のことにしか興味をもたないわれわれは、みな面食らった。しかし、とつとつと話される先生の話に引き込まれ、やがて誰もが古代の人々の営みに思いを馳せた。先生とともにあったあのときが、思えば至福のときであった。

先生は誰よりも新島襄を敬愛された。

少しでも新島を茶化したりすると真剣に怒った。だから徹底した「同志社ナシヨナリスト」だった。それに先生は現実の政治に身を焦しかねないロマンチストでもあった。そのため大学を辞され、京都市長選挙に立候補された。選挙で敗れた後は、はせ参じた岡本ゼミの面々と京都

精華大学を創設された。最初は経営も安定せず規模も小さな短大で、一口では言えない苦難に直面されたと聞く。しかしそれから三十数年、先生とそして最後まで先生を支え続けたゼミの卒業生たちは、精華大を「自由と自治」という新島精神を受け継ぐ、もう一つのすばらしい大学にされた。

逝かれるすこし前、先生は長く病に苦しんだ愛弟子の金丸輝男さんと、病院のエレベーターの前でまったく偶然に出会われた。万感胸に迫るものがあつたのだろう。二人はしっかりと手を握り、肩を抱き合い号泣されたという。そして、先生と金丸さんは相前後して旅立たれた。もう先生の聲咳に接することはできない。もうわれわれは、先生とともにあつたあの頃には帰れないのだ。

梅津 實（大学法学部教授）

# 鈴木泰正先生を偲んで



## 鈴木泰正氏略歴

一九一五年二月二十四日生まれ。三五年東京美術学校  
 図画師範科卒業後、五二年九月同志社女子中学校・高  
 等学校教諭として入社。六二年教頭。七四年退職。七  
 六〇〇一年二月一日永眠 八十五歳

一九七〇年、私が同志社女子中学校・

高等学校に入り、鈴木先生と一緒させて  
 いただいたのは五年ほどの短い間でし  
 た。私は英語を教えています、絵が好  
 きでいつも先生のおられる美術科に入  
 りしていました。当時、他教科の先生方  
 や職員の方も仕事を終えた後、美術科に  
 集まり、美術サロンさながら好き勝手に  
 油絵を描いていました。先生は指導はさ  
 れませんでした、色々楽しい話を伺っ  
 たことを思い出します。一九七三年、美  
 術のU先生と物理のH先生とヨーロッパ  
 の旅に出て、アルタミラの洞窟を見、マ  
 ドリッド入りした際、現地逗留の鈴木先  
 生と落ち合いました。フラメンコ舞踏や  
 トレドを案内していただきました。私達  
 は先生と別れポルトガルへ。帰りには、  
 また先生とパリで落ち合い、シャルトル  
 へ案内していただきました。先生は毎年

のように、スペインへ出かけられ、明る  
 い色彩の絵を描かれて、当時四条烏丸で  
 私の叔父がやっていた土橋画廊で毎年、  
 個展を開かれていました。オーソドック  
 ス、端正な絵で、ヨーロッパのあの雰  
 囲気、印象が適確にとらえられていま  
 した。スペイン国際美術賞展等で何度か受賞さ  
 れ、ヨーロッパ・アカデミー会員に列せ  
 られました。先生の丸太町のお宅へ何度  
 かお伺いしましたが、天井の高いアトリ  
 エには、まだ空だけを描いた小品がイー  
 ゼルにかかっていた。先生は個展の  
 案内状に、いつも、公害のない地中海の  
 美しき、悠久のヨーロッパの時間の流れ、  
 文化を大事にする伝統に触れられ、日本  
 への警鐘を鳴らしておられました。当時、  
 日本は正に高度成長の絶頂期で、公害な  
 んておかまいなく経済成長を遂げ、先生  
 のいわれていたように汚染された日本に

なっていっ  
 たのです。

日本が無闇  
 に外国文化  
 を取り入れ  
 ることを嘆  
 かれたつ、  
 ヨーロッパ  
 の古きもの

を大切にする人々との出会いがいつも先  
 生の活力となっていたようです。先生は  
 教頭職を務められ人望も絶大でしたが、  
 やはり芸術家として生きる道を選ばれ中  
 途退職されました。学校も益々忙しくな  
 り、先生のおられた頃のように誰にも絵  
 を描いておりません。ゆったりした時間  
 が流れ、先生と色々お話できたあの頃が  
 懐かしく思い出されます。

川島紘一（女子中学校・高等学校教諭）



「クレタ島」鈴木泰正

# 安枝さんを偲ぶ



安枝英紳氏略歴

一九四一年四月二〇日生まれ。七〇年同志社大学大学院法学研究科修士課程修了後、七二年同志社大学法学部助手として入社。七四年同専任講師、七七年同助教授、八三年同教授に就任。人文科学研究所長、法学部長、大学院総合政策科学研究科長を歴任された。二〇〇一年三月二七日永眠 五十九歳

安枝さんと親しくなったのは、山中俊夫さんが学部長になり、彼と私が教務主任になったところからだと思う。

当時は、山中さんも五十歳前後で、われわれ二人は四十台半ばということもあり、山中さんのおごりで本当によく飲んだものであった。先斗町界限が多かったが、学部カリキュラム、学内高校からの入学制度の問題から、学部同僚の品定め、好みのタイプの女性の話などなど。十二時を越えてから帰路につくのが通例であった。好みの女性のタイプについては不思議なこと三人とも一致するが、その他の話題のときは、なぜか意見が鋭く分かかれ、三人とも大声で持論を主張しあうが、意見の一致を見ないまま、いつのまにか他の話題へ移っているというところで、文字どおり時間のたつのを忘れていた。以来、すっかり肝胆相照らす仲になっ

た。法学部では、十年間停滞していた採用人事、一般教育と専門教育の区別撤廃に伴うカリキュラム再編成、法学研究科充実、司法試験合格者の増加など、課題は山積していた。学内の会議では意見がまとまらず、またまた夜の街へ繰り出し、酒を酌み交わしながら、夜の更けるのも忘れて議論しあったことを懐かしく思い出す。

安枝さん自身は在職中に学内のいろいろな役職に就いたけれども、自分の名誉や利益のために役職に就きたがる人を本当に軽蔑していたと思う。学部・大学のあるべき姿、進むべき道について本気で考えている人とは、具体的な内容や方法・手段などがいくら異なっているときでも、真摯に話し合い、意見を交換しあっていた反面、建前は立派であるが、本心は学部や大学のことをそんなに考えて

いないと感じた人とは、本気で話し合っているようには見えなかった。

学長候補者に推薦したのも、安枝さんのこのような性格からすれば、きっと学内の叡智をまとめて二十一世紀の私立大学として進むべき道を見つけてくれるに違いないと思ったからであるが、私の至らなさのため、残念な結果に終わってしまった。特に二度目の挑戦のときは、本人は当初から再度の候補者になることを嫌がっていて、もう一度負けたら大学に居れないと言っていた。この言葉が本当になつてしまった。

葬儀が終わったばかりの安枝さんのご自宅で、白木のお位牌の前で般若心経を唱え始めたら、途中で突然慟哭して、中断してしまつた。父親のときにも母親のときにも経験しないことであつた。

佐藤義彦（大学法学部教授）